



2026年8月5日
沖縄尚学高等学校
松尾 英樹

～ 1つの校舎に2つの学校からの脱却：「IB×探究」の融合を通じた相乗効果 ～ IB教育を安定的・継続的に実施・充実させるための校内支援体制の構築と実践

1. 導入：IB教育の安定・充実と学校全体の体制づくり

本校は、グローバル社会を見据えた「文武両道のたくましい進学校」として、確かな人間力と高い学力を備えた人材の育成を目指しています。校内には国際バカロレア（IB）DPを展開するコースと、特進コースをはじめとする一般コースが併設されています。しかし、これまでは学校全体として「IBワールドスクール」を意識した体制が不十分であり、一つの校舎に2つの学校が共存しているような分断状態にありました。その結果、両コース間に教育的な相乗効果が十分に生まれず、IB教育の良さが学校全体に浸透・共有されていないという課題を抱えていました。

IB教育を安定的かつ継続的に実施していくためには、IBプログラムを特定のコース内にとどめず、学校全体でその価値を共有し、支える校内支援体制が不可欠です。本取り組みでは、一般コースの「総合的な探究の時間」との連携を図り、教員間の指導体制（標準化や時間割調整）を整えるとともに、生徒間の協働を促すことで、結果として「IB教育そのものの学びをどう充実させるか」につなげることを目的としています。

2. 校内支援体制の構築：「IB×探究」の連携と組織的運営

探究コーディネーターを中心とした各教科担当約10名による教科横断的な教員チーム（高校1学年団）を組成し、一部の教員に負担を偏らせず組織的に運営する体制を構築しています。また、IBの課題論文（EE）等で活用される「学術的な問いの設定」「エビデンスに基づく検証」「適切な引用」といった作法を、学校全体の探究活動のルーブリックに組み込み、標準化に取り組んでいます。

【総合的な探究の時間における年間計画と進捗】

高1：教科別探究基礎講座（4月～7月）

各教科の特性を活かした体験型プログラム（11講座）を設置し、生徒が選択受講しました。教員自身が「なぜこのテーマを探究するのか」を示すことで、生徒が2学期以降の「グループ自主探究」で自ら問いを立てるためのヒント（種まき）を得られるよう工夫しています。

表1 教科別探究基礎講座（11講座）

化学基礎実験	理科（化学）の視点から、実験スキルや科学的な検証手法を学ぶ
3Dプリンターでものづくり	技術や情報を活用し、デジタル技術を用いたプロトタイプ制作や設計の面白さを体験する
文学のサプライチェーン	国語（文学）の視点から、作品が読者に届くまでのプロセスやその背景にある社会的・文化的なつながりを探究する

17文字で世界を作る	国語（詩歌）の視点を通じて、限られた文字数（俳句など）の中に表現される世界観や言葉の持つ力を体験的に学ぶ
タイパ社会にあえて抗う？ 「スローに生きる」音楽という選択	音楽や芸術の視点から、効率化（タイムパフォーマンス）を重視する現代社会における音楽の役割や価値を問い直す
世の中を変える政治のプロセス（政党・政策・選挙）	社会科の視点から、世の中の仕組みや社会的な意思決定がどのように行われているのか、そのプロセスを実践的に学ぶ
言語・文化・コミュニケーション理解のヒント	英語や語学の視点をベースに、非言語コミュニケーションや多文化共生、他者理解のヒントを探る
授業の外の数学	教科書の枠を超え、学問としての数学の美しさや理論的な思考プロセスの面白さに触れる
「探究」って？	探究学習そのものの本質や、自ら問いを立てて解決していくアプローチの基本を体験する
対話から育むコミュニケーション	コミュニケーションの本質について、ワークショップや対話を通じて実践的に体験する
身近な数学	日常生活の中に潜む数学的な法則や、身の回りの現象を数学的に捉え直す面白さを発見する

高2：進路軸による領域分けと探究プラン作成（4月～7月）

生徒の関心や将来の進路希望に基づき、8つの専門領域（工学、情報、理学、社会、文化・教育、医療、スポーツ・芸術、社会学等）にクラスの枠を超えてグループ分けを行い、フィールドワーク等を通じた探究プランの作成を完了しました。今後は中間発表・相互評価を実施し、年度末に向けて論文やプレゼン等多様な形で成果を取りまとめます。

3. 実践例：学年横断型の「先輩サポーター制度」（2026年1月実施）

IB教育と一般コースの相乗効果を生み出すための具体的な支援策として、2026年1月に「IB × 探究」の連携企画を試験的に実施しました（高3 IB生と高1一般コースの生徒）。

① 時間割の調整と「CAS × 探究」のコラボレーション

教務部門と連携し、特進コースとIBコースの探究学習の時間帯を一致させました。IBコースのCAS（創造性・活動・奉仕）の時間の一部を特進コースの探究学習と連携させ、「沖尚スタイル探究プログラム」の構築にIB生が直接関わることで、学年を越えた縦の協働体制を実現しました。

② 高3 IB生から高1生への探究サポート

高3のIB生がメンター（先輩サポーター）として高1生の「総合的な探究の時間」に直接参加し、課題研究に向けた資料作成や構成面のサポートを行いました。これにより、IB生から一般生へ「探究的な学習姿勢」の伝播を図りました。

4. 取り組みによる教育的効果：IB生にもたらした変化

この校内支援体制は、一般生へのスキル移転にとどまらず、「IB生自身の学びを充実させる」という大きな教育的効果を生み出しました。1月9日に実施した『先輩サポーター 授業後アンケート』からは、IB生に以下のようなポジティブな変化が確認されています。

①**自己の学びの再確認と自信の獲得（メタ認知）**：多くのIB生が、一般生に対して指導を行う中で、「データに基づきアイデアをまとめる力」「エビデンスの信頼性や引用への意識」「多角的な視点」といった面で明確な違いを感じていました。EE（課題論文）やIA（内部評価）での試行錯誤や失敗経験が、的確なアドバイスを行うための強みとなっていることに気づき、自分たちが培ってきたIBのスキルの価値を客観視し、自信を深める契機となりました。

②**批判的思考力と実践的課題解決力の深化**：行き詰まっている後輩のグループに対し、IB生は「問題の根本的な原因は何か」「解決策の有用性を別の角度から考える」といった指導を行いました。これにより、IBで学んだ批判的思考力やリサーチスキルを、実際の指導現場で応用・発揮することができました。

③**他者へ伝える難しさとコミュニケーションスキルの洗練**：指導プロセスにおいて、「自分の考えを言語化して分かりやすく伝えることの難しさ」や、「自分の意見の押し付け（思考の誘導）になってしまわないか」といった葛藤を経験した生徒もいました。相手の意欲を引き出し、対話を通じて気づきを与える経験は、IB生のコミュニケーションスキルや社会性スキルをより一段高いレベルへと引き上げる有意義な実践の場となりました。

5. おわりに：今後の課題と展望

本校の取り組みは、IB教育の優れた要素を学校全体の教育深化を支える原動力とし、コースの枠を超えて共に高め合う「学習者主体の学校文化」を創出する実践です。IB生がアウトプットを通じて自身の学びを深めるこの協働構造は、まさにIB教育の充実と定着に直結しています。 今後は、本支援体制をより強固なものとするため、教務部門と連携したカリキュラム・時間割の柔軟な運用（共通コマの恒常的な確保など）を進めるとともに、教員間の指導スキルの共有（ジョブアライク等）を定期的に設け、学校全体としての指導力とIB教育の安定的な運営体制を確立していきます。